

2024.7.1



毎年夏になると、日本では原爆問題がメディアで大きく取り上げられます。今年は特に、ウクライナ戦争に関連してロシ

アが核兵器の使用をほのめかしており、また春には「原爆の父」と呼ばれるアメリカの核物理学者オッペンハイマーを主人公とする映画が封切られたので、核問題に対する関心が一段と高まっています。私自身、核や原子力問題には現役の外交官時代から長年深く関わってきましたので、この機会に、79年前に広島と長崎に投下された原爆がどのような経緯で作られたか、その舞台裏に何があったのかを振り返ってみたいと思います。

「落とされた側」と「落とされた側」

まず、マンハッタン計

映画「オッペンハイマー」の国内用ポスター



画で主導的役割を果たしたJ・ロバート・オッペンハイマー博士（1904〜67年）のことは、前記の映画「オッペンハイマー」（クリストファー・ノーラン監督）でもよく知られるようになり、またご覧になっていない方には、ぜひ映画館に行つて、大画面でみることをお勧めします。核爆発の大音響の

原爆はこうして日本に落とされた

オッペンハイマーとフランク

迫力はテレビ画面では到底味わえません。ちなみにこの映画は、北米圏では昨年7月公開され、実在の人物を扱った伝記映画の中で歴代最高の興行成績を記録。今年3月、米アカデミー賞授賞式で作品・監督・主演男優賞・助演男優賞など7分野で受賞に輝きました。

この映画の日本での公開が欧米よりも半年以上も遅れたのは、日本人のこの映画に対する反応について映画制作会社が懸念していたからだといわれます。現に、試写をみた広島、長崎の被爆者たちからは、原爆の被害状況がほとんど全く描かれていないことに強い不満の声が聞かれます。



世界初の核爆発となった「トリニティー実験」(ウィキペディアから)

でB29から原爆が投下されたところで突然画面が変わり、次に現れたのは、10年以上たった広島で子どもたちが元気に遊んでいるシーンでした。その時私も強い違和感を覚えました。それを言うのはお門違いだと今は思っています。ただし、アメリカ人の科学者や映画監督たちが被爆の悲惨な状況に直接触れたがらないのは、それを知らないからではなく、むしろ知り過ぎていくからとみるべきでしょう。被爆状況は占領時代に米国の多数の専門家が徹底的に現地調査し、克明な報告書を作成しています。当然ながら彼らも良心の呵責(かしゃく)を感じてはいるのです。

(2面に続く)

オープンハイマーの戦後の苦悩

そのことはさておき、上述したようにこの映画は、オープンハイマーの波乱万丈の前半生と、一転して戦後の苦悩や葛藤を、さまざまな同時代人との複雑な人間模様の中で丁寧に再現しようとしたもので、その点では見事に成功していると言えます。

「閣下、私の手は血塗られたように感じます」 トルーマンは苦笑を浮かべてこう答えます。「ヒロシマやナガサキが恨むのは原爆を作った者ではなく、落とす決定をしたこの私だ」 オッペンハイマーはそれ以上多くを語ることはない。一方、ルイス・ストロース（元銀行家。戦後創設された米原子力委員会の初代委員の一人、のちに委員長）やエドワード・テラー（核物理学者）らは水爆製造を強く主張します。こうした両者の水爆問題をめぐる陰湿な対立は映画でも詳しく描かれています。結局この内部抗争に敗れたオッペンハイマーは主導権を失い、失脚。トルーマンは1950年に水爆製造を正式に指令します。

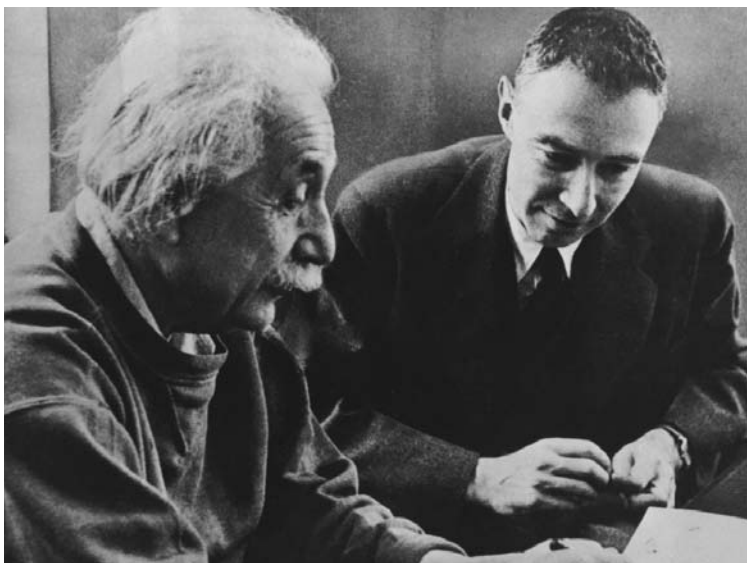
水爆開発をめぐる内部確執

オープンハイマーは戦後、核開発競争が国際的に加速化することをいち早く予測し、警鐘を鳴らすとともに、水素爆弾の開発には強く反対しました。原爆製造ですでに十分国家に貢献したと考えるオッペンハイマーは、原爆より桁外れに強力な水爆の開発には反対の立場をとりました。

原爆はこうして日本に落とされた

「閣下、私の手は血塗られたように感じます」 トルーマンは苦笑を浮かべてこう答えます。「ヒロシマやナガサキが恨むのは原爆を作った者ではなく、落とす決定をしたこの私だ」

しかし、戦後はこの原爆技術が拡散し、国際的な原爆開発競争が起こることをいち早く予見し、その「パンドラの箱」のふたを開ける役割を果たしたことを強く後悔し始めます。原爆が当初の攻撃目標であったドイツではなく、日本に投下されたことにも道徳的責任を感じていたようです。



アインシュタインとオッペンハイマー (ウィキペディアから)

ところで、この映画では正面から取り上げられていませんが、日本人として、ぜひ知っておいて

日本への無警告投下に反対した フランク博士



フランク博士(同)

の内通の疑いで1954年に公職から追放されました。その後は、かつて国民的英雄視された大科学者にしては不遇な晩年を送りました。1967年に62歳で他界した後、50年以上経った2022年になって、ようやく内通容疑が撤回されました。

報告書のポイントは、原爆をいきなり日本に投下せずに、まず砂漠か無人島のようなところに、日本政府の代表を含め各国の代表を招き、そこで爆発させる。その後日本の対応などを見て次のステップを決定するが、最終的に、後日談めきますが、フランク博士のシカゴ大学時代の教え子で娘むこのアーサー・フォード・ヒッペル(1898〜2003年)はマサチューセッツ工科大学(MIT)の物理学教授。私もヒッペル氏に頼まれた。日本の「非核三原則」の長男のフランク・フォード・ヒッペル(1937〜)もプリンストン大学の物理学教授で、核軍縮したことがあります。

フランク博士の子孫たち

フランク博士は、戦後、核廃絶、核軍縮を願って結集し、「原子力科学者会報」という専門誌を創刊しました。現在も続くこの雑誌の表紙は、人類が核戦争勃発の危機(破局)に至るまでの時間を示した「世界終末時計」(Doomday Clock)です。この雑誌には、

元外交官。ハーバード大学法科大学院卒。元国連環境計画(UNEP)アジア太平洋地域代表、日本国際問題研究所研究局長、元外務参事官。退官後東海大学教授(国際政治学)、現在はエネルギー戦略研究会会長のほか、外交評論家として活躍中。新城市出身、87歳。 kaneko@eeec.com.org